

### 研修資料③

#### 5分でケースをレポートする(2)～「その人」についてのアセスメント

##### 1. まずは言葉にしてみる

「あの人にどのように関わったらよいのか」に迷っているときは、「その人」のアセスメントが必要です。まずは、漠然と「こんな人」と感じていることや、「あれじゃあ、誰ともうまくいかないだろうな」などと思っていることを、しっかり言葉にしてみましょう。

##### 2. 三つの軸を意識する

研修資料④を使って、①生物(気質、発達、障害、疾患)、②心理(不安、葛藤、希望、自己感、認知、心理的資質、内省性、感情統制、防衛機制など)、③社会(対人関係の特徴や県境への適応)という3つの軸を意識しながら、「こんな人／子どもである」という理解や仮説を簡潔に述べてください。たとえば、「穏やかで親切なときと、イライラして怒りっぽいときが極端で、気分の波が大きい子です(感情、気分)。身体症状や一人で眠る寂しさを訴えてくるなど、常に関係を求めているようにみえます(不安)。ただし、本児が望んでいるのは、甘えや依存が満たされるような二者関係レベルの対人関係のようです(対人関係)。集団に適応することはできず、些細なことで怒り出したり、落ち込んだりするので、手厚い関わりが必要な子です(適応)」、あるいは、「中学3年生の女の子です。自己イメージは否定的で(自己感)、他者から好かれていないと感じやすいようです(自己・対象の認知)。居場所がなく、非行仲間からの誘いを断れないため、引きずられるような形で問題がエスカレートしている面があるようです(不安、対人関係)。知的には平均下位で、表現力や内省性はやや低いのですが(生物的な知的能力と内省性)、1対1の場面ではとても素直で、面接を一つの支えと感じてくれそうな子です」といった感じです。

##### 3. 言っていることと示した反応に注目する

普段から話していることや、ある出来事の際に示した反応は、「その人」の理解にとっても役立ちます。言動や反応にどのような意味があるか、どのように解釈できるかを考えてみましょう。たとえば、「あの子がドアを蹴破った」のは、みんなの前で自尊心を傷つけられたことへの憤怒かもしれないし、平等に扱われていないことや差別されたことが悲しかったのかもしれない。

##### 4. 無意識(身体化、失錯行為、抵抗、防衛など)に目を向ける

その人の言動だけに囚われず、「ああは言っているけれども、本当の本当はどんな気持ちなんだろう」とか、「表向きは身体的な不調で登校できないようだけど、本当の本当は学校での友だち関係に苦労しているのではなかろうか(心身相関、身体化)」「ご本人も気づいていないみたいだけど、遅刻が増えたのは、この面接がつかなくなっているためではないか(抵抗、失錯行為)」妙に明

るいけれど、本当の本当はとても悲しいのではないだろうか（防衛機制、この場合は反動形成）」などと考えてみてみます。

## 5. ストーリーを描く

その人は、どんな人たちと、どんなふうに暮らしてきて、どんな影響を受けてきたか、問題が発現する時期にはどのような出来事があった、それをご本人はどのように体験していたのか、その結果、どのような葛藤が生じ、それがどのような問題として顕在化し、維持されているのか、といったストーリーを読み解くことを意識してください。また、過去の重要な人間関係が援助者との関係に影響しているかもしれません（転移）。こうした視点は、「現在のその人」に目を向けるだけでは「理解できた」と感じられないときに役に立ちます。

ある地域で、夕方になると大声で叫び始める単身高齢者のことが問題になっていました。自宅を訪問した保健師は、この人に軽い片麻痺があることに気づきました。脳血管障害や認知症に伴う夜間せん妄の可能性を伝え、繰り返し受診を勧めましたが、頑なに拒絶されるだけでした。何度目かの訪問で、いつもは取り付く島のないような不機嫌な人が、家族の話題になると急につらそうな表情、しんみりとした口調になることに気づきました。その後、この人が親や兄弟からは見放されたと感じていること、さらに、前任者の勧めで受診に至ったものの、その後、訪問が減ったことで、前任者からも見捨てられたと感じていることがわかってきました。生活上の安全管理はできているので、受診を急ぐよりも、関係づくりを優先し、受診したとしても地域の支援が薄くなることはないかと理解してもらう必要がありそうです。

## 6. 強みと伸び代にも目を向ける

厳しいケースであればあるほど重要な視点です。

## 7. 心理的資質を評価する

心理療法的なアプローチを考えているときには、その人の心理的資質をアセスメントします。内省性、洞察力、言語化する能力、援助者との間で安定した関係を維持できるかどうか、などです。心理的資質と年齢に応じて、言語的・洞察的なアプローチ、認知にはたらきかけるアプローチ、適応的な行動を増やそうとするアプローチ、遊戯療法的なアプローチなどのうち、どれを選択するかを検討してください。関係機関につなぐ際にも、心理的資質が高い人はカウンセリング系の機関、そうでない人は活動系の機関が向いているかもしれません。